

千代鶴生害の地は

西野のお塔か石打か

林 寅 喜

(会員 佐伯市中の島)

大永七年(一五二七)十一月二十五日(一説には七月二十五日)、佐伯惟治の嫡子千代鶴(九歳)が非業の死を遂げたという場所は西野のお塔か、石打か、これは、私がかねてから疑問視していた郷土史の一面である。

そこで、今回この真相を究めたくて資料をもとに、地形と供養塔をはじめ黒沢道との関係まで含めた整合性を求め解明を試みた。

先ず、事の顛末を詳しく記述した『梅牟礼実録』と『佐伯梅牟礼惟治記』の中から、関係した部分を抜粋すると

一、梅牟礼実録

『千代鶴君西野村にて御生害の事』

草負う馬を借りて懐き乗せ、三河内を志して漸く西野まで行きけるに 黒沢より走り下るものあり 間近く来るに付き見れば君の供人泥谷将監なり たがいこれとはどうに知らせ給うまじ 君は日向の國に趣き給う所に(中略)此上若君の御身覚束なし府内より免許の沙汰も思ひもよらず 是より船をかり四国へ渡海し給うべしと評議する所にさわやかに鎧たる武者鞭を上げ 鎧を合わせ駆せ来る所主従遙かに見て 是は正しく討手と見えたり そのまま若君を木陰に忍ばせ 様子を見つくりせんとせし間もなく大音声に叫ばりけるは それに御座候は佐伯千代鶴君にて候はずやと 声かけたれば是は遁れぬ所と思ひ 人手には掛らじと若君に自害させ 其のまま冨田・泥谷・佐伯と立ち並んで腹切りたり

二、佐伯梅牟礼惟治記

御用心のためここは一先ず落ちさせ給えと 千代鶴公を進め奉れば 武士の命名を惜しみて命を惜しまぬ習として早や切腹と心得 腰刀御手に持たせられ 堅田卯の町古城を落ち給い西野村の方へ至る 御一人空しく御生害遊ばざる御運の拙き処 蝶よ花よと育てたまえる叔母君櫻

御前 やるせなき思いに涙しやくり上げ 終に御身を水中に沈めてはかなく成り給う(原文は片カナ)

三、実録発行の経緯

・梅牟礼実録は大友興廢記(註)をタネ本とした神史で、現在の歴史小説と同じフィクションを含んだ物語であるが、今のところ他に立証される資料はないのでこれに拠らざるをえない

⑧大友興廢記は寛永十二年(一六三五)、勢州の人杉谷宗重の撰書により発行された。それは宗麟の死(天正十五年)から四八年後のことである。

・発行の時期

同書巻九「巴作りの太刀の事」末尾に十四代惟定・十五代(惟重)佐伯家断絶、十六代惟寿(三代権之助)とあるから、惟重が死亡した正保元年(一六四四)から、惟寿(系譜では惟信)が死亡した元禄三年(一六九〇)までの間に書かれたことになる。

これについて佐脇貫一氏は佐伯史談の中で、延宝年間(一六七三〜八〇)であったとしている。

従って実録は事件後一二〇年以上経って発行された事

になる。

参考 佐伯権之助系譜

①惟定 伊勢津藩藤堂家に仕官 四、五〇〇石

元和元年六月没

②惟重 右に同じ 四、五〇〇石

正保元年二月没

惟寿 不詳

③惟信 右に同じ 一、五〇〇石

元禄三年八月没

⑨右から系譜では惟信が三代を継いでいたことになり、

実録の内容とは異なる。

なお、実録では佐伯氏歴代の数字が一桁間違っているので訂正して記載した。

四、佐伯梅牟礼惟治記

安政四年(一八五七)廣福寺住職河野性海が写し取ったとされ、原本は不明といわれるが、内容から実録をタネ本として書かれた公算が大きい。

そこで解明に当り、西野と石打にある惟治と千代鶴の供養塔を紹介すると、



石打の石塔群……惟治・千代鶴君供養塔

西野 〓 宝暦十三年（一七六三）造立 一三三六年后
 石打 〓 天正二年（一五七四）造立 四七年后
 これは五〇回忌を前にして造立したものと考えら
 れる。



西野の石塔群……西野のお塔

五、実録の内容検討

「鞭を上げ鎧を合わせ駆せ来る所(を) 主従遙かに見て是は正しく討手と見たり」から、

・右について

・お塔から見た場合

別図Aの通り山鼻に遮られて視界は最大で二〇〇呎、それも途中から堅田川に添って来た時のことで、村内を通り山鼻を廻った場合は一〇〇呎しかない。したがって、これくらいの距離では自害させることも従者が立ち腹を切る暇もなかったと思う。まして六〇呎も離れた山裾(自害したと伝えられる岩)まで行くことなど出来る筈もなく、実録の記述と現地には大差があり適合するのは西野という地名だけである。

・石打から見た場合

別図Bに示すように六〇〇呎の距離があり、高低差もあるため堅田川を挟んでも充分目視出来る。そこで討手と誤認して自害させ、従者三人立ち腹を切ったということも理解出来る、記述は適正で稗史といえども整合性は合致する。なお、佐伯梅牟礼惟治記には該当する事項についての記述は見当たらない。

六、実録の作者と玄海和尚

実録の作者(名前は不詳)は、現地の地形と地名の相対を認識せずに書いたという思いが強く、そのため後世には西野の地名だけが重視され、内容の解明はされないまま、一三二六年後の宝暦十三年に供養塔を造立し、さらに三〇年後の寛政五年、柏江国寺の住職玄海和尚がこれを手本として碑文を書き、千代鶴自害の地と伝えられた山裾の岩傍に祭祀した地藏尊の台座に刻んだものと思う。

七、お塔の由来について

天正十四年(一五八六)十一月、佐伯方と島津方との間で行われた堅田合戦の時、敗走した島津方が府坂峠に追い詰められて決戦場となったのがお塔の付近で、多くの戦死者を出した所。その骸を葬った墳墓の跡に、一七七年後になって惟治親子の供養塔を造立したと考えられ、山裾の岩は刀折れ矢玉尽きた島津方の武将が、自刃した所ではなかったろうか。今に残る府坂の三ツ塚のうち、そのひとつは此処ら辺りにあったのかも知れない。



府坂の三ツ塚

八、当時の黒沢道について

この時期黒沢への道はどのような経路を辿っていたのか、これが解明の原拠と考へ調べて見た。

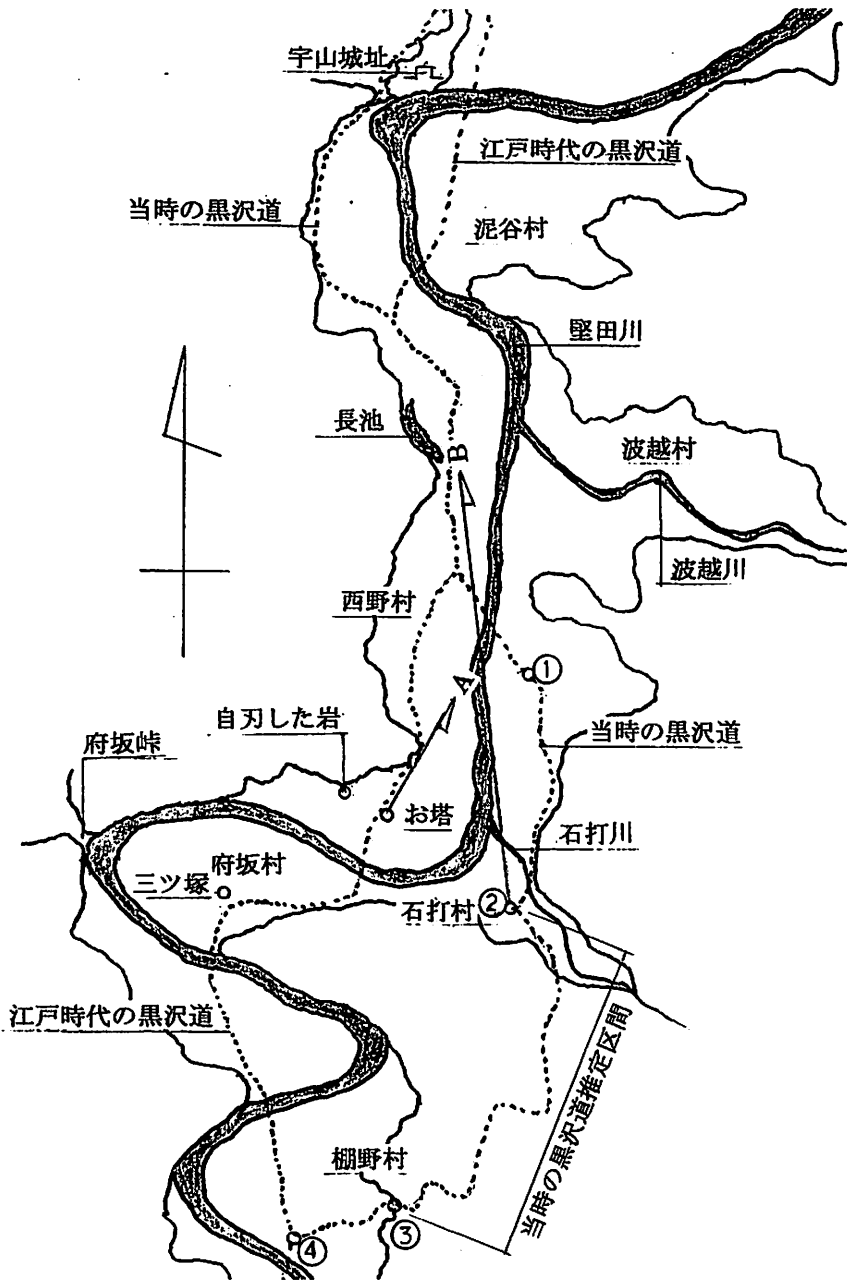
実録には『黒沢より走り下るものあり』とあるのみで他に何も書いていない。

そこで、明治の五万分の一地図(註)を調べて見たら汐月から宇山城址の後(西側)を通過して佐土原に出、南下して西野から左に堅田川を渡り、石打に通ずる小径があることが分った。石打から先は記されていないが、山越えして棚野に通じていたことは充分考えられる。

㊦江戸時代(時期不詳)の村ごと天領地図はあるが、反別・石盛の書き入れが主で、道路網は余りにも大略過ぎて経路の詳細は不明、そこで前記明治の地図によつた。

その理由として古来より、人の往来する道筋にはある地点(区間)ごと、今日の道路標識に当る石造物が造立されているということに注目し、調べて見たら次の四基であることが分った。それは、

- ①六地藏 石打入り口 大永四年(一五二四)
- ②無縫塔 惟治供養塔横 大永三年(一五二三)



③六地藏尊板碑 棚野 永正 五年(一五〇八)

④石幢六地藏 棚野津留 天正十八年(一五四九)
である。

右のうち六地藏は人の死後を地獄・餓鬼・畜生・修羅人間・天上の六道に導くといわれ、古くから路傍や墓地などに祀られていた。そこでこれにより①④を結ぶと棚野から石打との間に、山越えの道があったということになるが、棚野は僅か数軒(註)の寒村で人の行き来も少なく、地藏尊などの造立はしなかったと思う。

しかし、此処が黒沢への往還であったと考えれば納得できる。

⑤棚野の村高は江戸時代七六石であった。そこで一軒当りの持ち高を一〇石と仮定すると凡そ七軒、農民は年貢を納めた残り五〜六石で家族数人を養うことは並み大抵ではなかったと思うが、持ち高を増せば軒数はより少なくなってしまう。

余談になるが、惟治が落ち延びた道を前図をもとに辿って見たら、龍護寺に一泊した一行は、大内から高城山(椋野道への分岐点)に登り、観喜に下って大越川を渡り、寺田から汐月に出て以下前述のルートを黒沢さして落ち

て行ったと考える。

九、江戸時代の黒沢道

前図五万分の一によれば、別図のように宇山の中心から堅田川を渡り、西野の手前で右折してお塔の前を通り府坂・竹角を経て④の棚野津留で交わっていた。

このルートでは堅田川を五度も渡っていたが、江戸時代に入ると架橋方法も進んで、丸木橋から土橋へと移行したことにより、路線も山路から平地に移し、産物の運搬や往来に利便を図っていたと思う。

なお、現在の県道は明治十六年に路線決定をして、二十二年に着工、二十六年に開通した。

むすび

以上実録に基づいて地形と供養塔をはじめとし、黒沢道まで含めて検討したが、結論は石打の方が整合性は高いと確信した。

一方お塔は前述の通り、堅田合戦に於ける将兵の墳墓跡と見るのが至当と考える。

以上が解明して得た結論である。



府 坂 峠

なお、『歴史放談』は今回を以て終わりとなります。

参考図書

榎牟礼実録

佐伯榎牟礼惟治記

佐伯氏一族の興亡

歴史散歩事典